

① ビートたけし 著

## 『間抜けの構造』

(新潮社)

本書は、誰もが知っているお笑いタレントというよりも映画監督といったほうがピッタリくる北野武さんが書かれたものです。

「漫才の間」から始まって「映画の間」、「スポーツの間」、「人生の間」といったように色んな角度から「間」というものを捉えています。書名からは想像できないですが、かなり参考にできる内容です。日本人が大切にしてきた「間」を分析・研究することによって、著者の芸術的才能が開花したのだと確信する一冊です。

779.911 ||Bit (N.K.)

③ 高野秀行 著

## 『移民の宴：日本に移り住んだ外国人の不思議な食生活』

(講談社)

今、日本に207万人の外国人が暮らしています。彼らの多くは、一時的な滞在者ではありません。

日本で暮らす外国人の暮らし、特に食生活について私たちは、意外に知らない事が多いかもしれません。著者は、「日本で暮らす外国人の真の姿を見てみたい。」と考えて、国内で暮らすいろんな国籍を持つ外国人の食事風景を中心に取材してまわりました。

訪問した建物の扉を開けると、ドラえものの「どこでもドア」のようにまるで、一瞬で外国に行ってしまうような不思議な体験が続られています。

383.8 ||Tak (S.S.)



② 岩水大和 著

## 『ぼくらの「就活」のバイブル』

(KKロングセラーズ)

就職は学生時代に通る、大きな試練の一つです。多くの人はアレコレ迷いながらも、就活を進めているというのが本当の所ではないでしょうか。本書は、その難関を大上段に構えるのではなく、良き先輩がアドバイスをしてきているかの様に、口語調で優しく、時に迫力を持って語りかけられます。

それもその筈、著者は「就活」コンサルタントとして活躍されているのですから。これはもう、鬼に金棒状態です。就活をする人すべてに、早い時期に読んで頂きたい一冊です。

377.9 ||Iwa (T.F.)

④ 熊井明子 著

## 『シェイクスピアに出会う旅』

(岩波書店)

著者は、シェイクスピアの研究者であると同時にポプリの研究者でもあり、この本はシェイクスピアの作品と香りとの関わりをテーマにしたユニークな本です。登場人物の台詞に出てくる花やハーブの持つ意味を理解するとより深く演劇を楽しむことができると説明しています。例えば、『ハムレット』では気が狂ったオフィーリアが王にフェンネルとオダマキを手渡しますが、その意味は虚偽と浮気だというように。

この他に、シェイクスピアの故郷を訪ねて演劇に登場する料理を味わうといった、一味違う旅行案内書も兼ねています。

932 ||Kum (F.O.)